

## 杜甫の仲人失敗について

深澤 一幸

大阪大學

盛唐から中唐にかかる過渡期を代表する大詩人杜甫（七一七—七七〇）は、「此の老には有らざる所無きを見る」と評されるごとく、いかなる分野にもその詩才を發揮するが、それは結婚の斡旋という俗の俗なる分野においても、發揮される。これから私が取り上げようとするのは、代宗の大曆三年（七六八）の正月、詩人五十七歳、まだ長江北岸のまち夔州（いまの四川省奉節縣）において、この年の春三月には夔州を離れ三峽を下るといった時期に作った近體詩「送大理封主簿五郎親事不合、却赴通州、主簿前閬州賢子、余與主簿平章鄭氏女子、垂欲納采、鄭氏伯父京書至、女子已

許他族、親事遂停」（南宋・趙次公「新定杜工部古詩近體詩先後并解」己帙卷一、南宋・郭知達「九家集注杜詩」卷三十三、南宋・蔡夢弼「草堂詩箋」卷三十五、清・錢謙益「錢注杜詩」卷十七、清・仇兆鰲「杜詩詳注」卷二十一、清・浦起龍「讀杜心解」卷五之四、清・楊倫「杜詩鏡銓」卷十八）、訓讀すれば「大理の封主簿五郎が親事合わず、却つて通州に赴くを送る。主簿は前の閬州の賢子なり。余は主簿の與に鄭氏の女子に平章し、納采せんと欲するに垂んとするも、鄭氏の伯父の京書が至り、女子は已に他族に許す（という）。親事は遂に停まる」である。

この長い詩題の意味は、縁談がまともならず、通州（いまの四川省達縣市）にいくことになった大理寺（尙書省刑部が決議した政令の實務を行う役所で、檢察と裁判を擔當する）の主簿（下級官、從七品上）の封五郎君を送る。主簿の封君は前の閬州（いまの四川省閬中縣）刺史のご令息である。私は封君のために鄭氏の娘との縁談をとりもつて、結納をおさめる直前まで進んだところで、鄭氏の伯父どのの都長安から手紙がとどき、そこには「娘はもう他家に嫁がせること

にした」とあつた。縁談はそこで取りやめになった。

「親事」は婚事、つまり結婚に向かう縁談・縁組などという。「納采」は、婚禮の六禮、つまり納采・問名・納吉・納徴・請期・親迎の第一で、まず媒介人によつて女家に婚姻の意思を通じさせてから、男家から女家に求婚の贈り物をする、結納。「儀禮」土昏禮に「昏禮。下達し、納采は鴈を用う」とあり、鄭玄の注に「達は、通也。將に彼れと昏姻を合せんと欲すれば、必ず媒氏をして其の言を下通せしむ。女氏之を許さば、乃ち後に人をして其の采擇の禮（女子を擇んだしるしの贈り物）を納めしむ。鴈を用いて摯と爲す者、其の陰陽に従いて往來するを取る」といい、賈公彦の疏に「納采に納むと言う者、其の始め相い采擇し、女家の許さざるを恐るるを以つて、故に納むと言う」という。

また「晉書」后妃傳下「成恭杜皇后」には「后は少くして姿色有り、然れども長じて猶お齒無く、來たり求婚する者有らば輒ち中止す。帝の納采の日に及びて、一夜にして齒は盡とく生ず」という、納采にまつわる不思議なはなし

杜甫の仲人失敗について（深澤）

がある。

婚事の世話をする「平章」については、清の朱鶴齡が引く「太平廣記」卷二百八十一の傳奇小説「櫻桃青衣」（陳翰の「異聞集」に出るか）をあげよう。

天寶の初め、范陽の盧子有り、都に在りて擧に應ずるも、頻年第せず、漸く窘迫す。嘗つて暮れに驢に乗り遊行し、一精舎の中、僧有りて開講し、聽徒甚はだ衆きを見る。盧子は方に講筵に詣るに、倦みて寝ね、夢に精舎の門に至り、一青衣の一籃の櫻桃を携え下坐に在るを見る。盧子は其れ誰が家ぞと訪い、因りて青衣と共に櫻桃を喰らう。青衣云う、「娘子は姓は盧、崔家に嫁ぐ。今は孀居して城に在り」と。因りて近屬を訪えば、即ち盧子の再從姑也。青衣曰わく、「豈に阿姑の同に一都に在るに、郎君の起居しに往かざる有らんや」と。

盧子は便ち之に隨い、天津橋を過ぎ、水南の一坊に入るに、一宅有り、門は甚はだ高大なり。盧子は門下

に立ち、青衣は先に入る。少頃にして、四人の門を出ずる有り、盧子と相い見るに、皆な姑の子也。一は戸部郎中に任じ、一は前に鄭州司馬に任じ、一は河南功曹に任じ、一は太常博士に任ず。二人は緋を衣、二人は縁を衣、形貌は甚はだ美わし。相い見て言敘し、頗る歡暢を極む。

斯須にして、引かれて北堂に入り姑を拜す。姑は紫衣を衣、年は六十許可かり、言詞は高朗、威嚴は甚はだ肅たり。盧子は畏懼し、敢えて仰ぎ視る莫し。坐せしめ、悉とく内外を訪うに、備さに氏族を諳んず。遂に「兒は婚姻せるや未だしや」と訪うに、盧子は「未だし」と曰う。姑曰わく、「吾れに一外甥女子の姓は鄭なる有り。早に孤なり、吾が妹を遣て鞠養せしむ。甚はだ容質有り、頗る令淑有り。當に兒の爲に平章すべし。計は必らず遂ぐるを允す」と。盧子は遽かに即ち拜謝し、乃ち鄭氏の妹を迎え遣む。

頃有りて、一家は並びに到り、車馬は甚はだ盛んなり。遂に曆を檢べ日を擇び、云う、「後日は大吉なり」

と。因りて盧子と議を定む。姑は云う、「聘財・函信・禮席は、兒は並びに憂うる莫かれ。吾れは悉とく與に處置せん。兒は在城の何の親故有るや」と。並びに名姓を抄し、並びに家第を具え、凡そ三十餘家、並びに臺省及び府縣に在るの官たり。明日に函を下し、其の夕に結を成す。事事華盛にして、殆んど人間に非ず。明日に席を拜し、大いに都城の親表を會す。席を拜し畢り、遂に一院に入る。院中の屏・帷・牀・席は、皆な珍異を極む。其の妻は年は十四五可かり、容色は美麗にして、宛がら神仙の若し。盧生は心喜びに勝えず、遂に家屬を忘る。

全文の半分弱を引いてしまつたが、それはこの小説が重要な消息を含んでいるからである。まず第三段、姑が盧子にかたつた言葉「當に兒の爲に平章すべし」おまえのため結婚をまとめてやろう、にもとづき、朱鶴齡は「此れに據れば、則ち平章は、唐人の通好の語也」という。

また盧子と同じく盧姓の再從姑は崔家に嫁いでおり、し

かも外甥たる女子の姓が鄭ということは、盧家がこの崔・鄭の兩家ともうすでに姻親關係にあることを意味し、そのうえに更に盧子と鄭氏の女子が結婚して、この關係はより堅固になったわけである。ここで興味深い資料をあげよう。「太平廣記」卷一百八十四に「國史異纂に出づ」としてあげる「七姓」である。

高宗朝は、太原の王、范陽の盧、滎陽の鄭、清河・博陵の二崔、趙郡・隴西の二李等の七姓を以ってす。

其の族望は諸姓と婚を爲すを恥じ、乃ち其の自から相い姻娶するを禁ず。是に於いて敢えて復た婚禮を行わず、密かに其の女を裝飾し以って夫家に送る。

基本的には七姓の間でのみ通婚し、「諸姓」他姓との通婚を恥としたのである。これは高宗の時の状況だが、小説が描く玄宗の天寶時にもつづいていたことは、范陽の盧子と（おそらく滎陽の）鄭氏のむすめの結婚、盧氏の姑の（おそらく清河か博陵の）崔家への嫁入りからもわかる。そして

杜甫の仲人失敗について（深澤）

それは、程度は多少ゆるくなったかもしれないが、杜甫のうたう大歴時にも残っていたとみるべきだろう。

そして杜甫の母は、「杜甫年譜」（四川省文史研究館編、四川人民出版社、一九五八年十二月）の「世系」によれば、その文才を則天武后に認められて鳳閣舍人・司禮少卿などを歴任した崔融（六五三—七〇六）の長女で、まさに清河の崔氏にあたり、もちろん七姓の内に含まれる。それゆえ、杜甫の屬する襄陽の杜家も七姓に準ずる家となり、封氏と鄭氏的女子との縁談を、杜甫は取り持つことができたのである。

「封五郎」の封氏は七姓には入らないが、祕書（監）たる會稽の賀知章撰の「大唐の故の銀青光祿大夫・行大理少卿・上柱國・渤海縣開國公封□□□□并びに序」（陳長安主編「隋唐五代墓誌彙編」河北卷第一冊、天津古籍出版社、周紹良・趙超編「唐代墓誌彙編續集」上海古籍出版社、二〇〇一年十二月）によれば、開元九年十一月六日に葬られた渤海のひとと封禎、これはどうも「封五郎」の先代にあたるようだが、「夫人は博陵の崔氏にして、周の司徒たる宣猷の曾孫、皇

朝の太子内直監たる安都の女」とある。渤海の封氏も準七姓といえるだろう。そして夫人の美德について「訓えを徳門（女家）に稟け、嬪いを高族（夫家）に奉じ、吾が纓に爾が珮、琴瑟克く諧う」と述べるが、これは七姓の女子すべてに共通するだろう。

また、杜甫が詩を贈った「封五郎」の名前について、これまでの注釋は何もいわないが、それを知る手がかりとして、民國の張鈞が河南省新安縣西の鐵門鎮に建てた千唐誌齋のコレクションに収める拓本に「唐の故梁州城固縣令たる渤海封君の墓誌銘并びに敘」（河南省文物研究所編「千唐誌齋藏誌」下冊、文物出版社、一九八四年一月、周紹良編「唐代墓誌彙編」下冊、上海古籍出版社、一九九二年十一月）がある。

墓誌は高さも幅も三三・五センチメートル。著者は「前□□節度推官にして試大理司直・飛騎尉たる范陽の張勸の纂并びに書」とある。二十四行、行二十四字、楷書。蓋には篆書で「大唐故封府君墓誌銘」と刻まれている。この故の梁州（いまの陝西省漢中市）の管轄となる城固縣（いまの陝西省城固縣、梁州のすぐ東にある）の令で渤海のひと封君

とは、封揆なる人物で、享年五十一歳、位は縣令どまり、貞元二年（七八六）七月六日に洛陽の道光里の昭成精舎で亡くなり、同月二十二日、洛陽の邙山南原に葬られた。とすれば、開元二十四年（七三六）の生まれである。

この墓誌はまず「君、諱は揆、字は揆、渤海の蓆（いまの河北省景縣）の人也。其の裔胄の聯茂するは、史課に詳しく、纓冕の世を嗣ぐは、官婚に見ゆ」とはじまり、つづいては「王父は諱は哲」祖父は封哲と述べる。それにつづくのは次の一行である。

皇考は諱は議、蓬・集・閩・明四州の刺史たり。

つまり封揆の父君は封議という名前で、蓬州・集州・閩州・明州の刺史を歴任したというのである。とくに封議が閩州刺史になった時期は、「資治通鑑」乾元元年（七五八）に「前の祭酒の劉秩を閩州刺史に貶す」などがあるので、この劉秩の直前たる肅宗の至徳年間かもしれない。

ここでもう一度杜甫の詩題を見てもらいたい。そこには

「主簿は前の閩州の賢子なり」とあつた。時期からみても、この封五郎の父で前の閩州刺史だった人物は、封議としてよいだろう。そして、その息子が何人いたかわからないが、その一人は封揆であり、かれが「封五郎」だった可能性は高い。

そこで、かれの墓誌銘をみてみると、

時に河南元帥太尉の李公は君が利の無間に入るを以って、君を徐州彭城縣（いまの江蘇省徐州市）の尉に奏す。君が能く目を擧ぐを以って、君を楚州安宜（いまの江蘇省清江市の南）の主簿に轉ぜしむ。劍南東川節度使の鮮于公は君と舊を通じ、君が材を理むるを知り、君を巴西督郵に奏す。

とある。「李公」は、上元二年（七六一）五月十一日にまた太尉兼侍中を拜し、河南副元帥に充てられ、臨淮に本據をおいた李光弼である。封揆はかれの引き立てで、大理寺と關係するかもしれない「主簿」になっている。「鮮于公」

は、大曆三年（七六八）五月に邛州刺史から梓州刺史となり、劍南東川節度使に充てられた鮮于叔通である。封揆が鮮于の引き立てで、いまの四川省綿陽市にあたる「巴西」の「督郵」郡守の下役としてその郡下の縣の行政を監督する官、にしてみらったのは、鮮于が梓州に赴任してからのようだが、それ以前、邛州（いまの四川省邛崃縣）にいたときから、封揆を四川に呼び寄せ、面倒をみていたのだろう。そしてもし「封五郎」が封揆だとすれば、この縁談がこわれた大曆三年、かれは三十三歳だったことになる。「封君の墓誌銘」には「君は明州府君の冢嗣也。年肇め弱冠にして、中原は象無く、豺虎は路を塞ぎ、華夏は始めて戎たり」とあるので、「弱冠」二十歳のころは安史の亂にまきこまれ、結婚もできず、三十歳過ぎてやっと縁談が來たのだらう。

## 二

ここからは、詩の本文を、その讀解の精確さによって「杜甫の功臣」と稱された南宋の趙次公の注釋「新定杜工

部古詩近體詩先後并解」(林繼中輯校「杜詩趙次公先後解輯校」下冊、上海古籍出版社、一九九四年二月)によりつつ讀んでいくことにする。まずは第一・二句。

禁嚮去東牀 禁嚮 東牀を去り

趨庭赴北堂 庭を趨りて北堂に赴く

帝以外だれも手をつけられぬ豚の首肉のごとく婿入りが決まっていた君は王羲之が婿と認められた東ベッドのごとき場所を去るはめになり、母親を見舞うとて通州のご母堂のところに旅立つ。

上句は、趙次公はまず「親事合わざるを言う也」と説明した後、「禁嚮の事」については「晉書」謝混傳にもとづいていう、

晉の謝混、字は叔源。孝武帝は晉陵公主の爲に婚を求め、王珣に謂いて曰わく、「主の婿は但だ劉眞長・王子敬の如くんば便ち足る。王處仲・桓玄子の如きは

不可なり、才小さくして富貴ならば、便ち人の家事に豫らん」と。珣は對えて曰わく、「謝混は眞長には及ばずと雖も、子敬には減らず」と。帝曰わく、「此くの如くんば便ち足る」と。未まだ幾ばくならずして、帝崩す。袁山松は女を以つて之に妻わさんと欲す。珣曰わく、「卿は禁嚮に近づく莫かれ」と。初め、元帝は始めて建業に鎮し、公私ともに窘しく罄く。一豚を得る毎に、以つて珍膳と爲す。項上の一嚮は尤も美ければ、輒ち以つて帝に薦め、群下は未まだ嘗つて敢えて食らわず、時に於いて呼びて禁嚮と爲す。故に珣は因りて戯れを爲す。混は竟に主を尙る。

「東牀の事」については「晉書」王羲之傳を引いていう、  
太尉の郗鑒は門生をして女婿を王導に求めしめ、  
(導は)東廂に就きて徧ねく子弟を觀しむ。門生は歸り、鑒に謂いて曰わく、「王氏の諸少は並びに佳し。然れども信の至るを聞きて、咸な自のずと矜り持す。

惟だ一人のみ東牀に在り腹を担いて食らい、獨り聞かざるが若し」と。鑿曰わく、「正に此れ佳婿なる邪か」と。之を訪えば、乃ち義之也。遂に女を以つて之に妻わす。

下句は、まず「通州に往くを言う也」と説明し、「趨庭」については「論語」季氏篇の、孔子がひとり立っていると、息子の「鯉は趨りて庭を過ぐ」、そこで「詩經」を勉強したか尋ねると「まだです」と答えたので、「詩經」を勉強しないと言葉にならないと諭し、孔鯉は引き下がって勉強した一幕をあげる。

「北堂」については、「則ち母の堂也」として、「詩經」衛風「伯兮」の「焉いずくぞ諶草を得て、言ことに之を背に樹えん」とその鄭玄注「背は北堂也」をあげる。

つぎは第三・四句。

風波空遠涉　風波　空しく遠く涉り  
琴瑟幾虚張　琴瑟　幾ほどんど虚しく張る

杜甫の仲人失敗について（深澤）

ここ夔州から通州まで風吹き波立つ長江をさかのほられる遠い旅路も一人ではむなしい、まるで夫婦和合の琴瑟が弦は張ったものの合奏できなかつたよう。

趙次公は、上句については「申かねて通州に往くを言う」と説明し、下句は「申かねて親事の合あわざるを言う」と説明する。

下句の「琴瑟」については「夫婦は以つて琴瑟に比ぶ」として、「詩經」小雅「常棣」の「妻子の好く合あうは、瑟琴を鼓するが如し」を引く。それを受ける「虚張」については、漢の董仲舒の言葉「琴瑟の調わず、甚だしき者は必ず解きて更に之を張る」（「漢書」董仲舒傳）を引く。また「幾」については、「公の自注に「洎きを音とす」と云う。蓋おもうに巨至の切ならん。洎は、及ぶ也。而して「幾」も亦た恰も此くの如き（及ぶ）の義也。杜牧の「李給事」二首の一、「樊川文集」卷二 詩に「鉄鎖たる朱殷は幾んど一空」と云うも、亦た此れ（及ぶ）の義也」と詳解する。

つぎは第五・六句。



渥水出麒麟 渥水は麒麟を出だし

崑山生鳳凰 崑山は鳳凰を生ず

君は敦煌付近の渥洼水から生まれた駿馬のよう、鄭氏の娘は崑崙山で生まれた鳳凰のよう、いずれ劣らぬ優れたカップル。

趙次公は、上句について「専ら封主簿を言う」と説明し、下句について「専ら鄭氏の女子を言う」と説明したのち、一般論として「尋常の兩句は、或いは皆な用いて一人の身を美め、或いは一句は彼れを説き、一句は此れを説く。詳しくは「句法義例」に見ゆ」と述べる。この杜甫の二句は、後の「一句は彼れを説き、一句は此れを説く」にあたるわけである。「句法義例」とは、趙次公が杜甫の詩句の構成法を詳しく解説した著作と思われるが、残念ながら逸書となつてゐる。

そして、「故に之に繼くるに」兩家誠歎歎、中道許蒼蒼を以つてし、其の初めは（杜甫の）平章に従うを言う也」とつづける。

上句の「渥水の事」について、趙次公は「漢の武（帝）の元鼎四年、馬が渥洼水の中に生ず」（漢書武帝紀）を引き、「麒麟」については「則ち駿馬の名」という。

下句については、まず「葛仙公傳」の「崑崙は一つに積石瑤房と曰う」（藝文類聚）卷七・山部上・崑崙山）を引き、ついで古本「莊子」に載せる老子の言葉、「吾れ聞くならく、南方に鳥有り、其の名は鳳と爲す。居る所は石を積むこと千里」（藝文類聚）卷九〇・鳥部一・鳳）を引いて、「則ち崑崙は以つて鳳凰を生ずと言う可し。舊注に（張衡の「東京の賦」の）「丹穴の鳳凰（を舞わす）」を引くは、却つて是れ丹穴也（丹穴山のこと、崑崙山ではない）」と結論する。

つぎは第七・八句。

兩家誠歎歎 兩家は誠に歎歎たり

中道許蒼蒼 中道は許くも蒼蒼たり

封と鄭の兩家はどちらも誠意をもつて結婚話を運び、そ

の交渉途中ではかなり實現性が高まっていた。

この二句には、趙次公の注釋はない。

つぎは第九・十句。

頗謂秦晉匹 頗る謂う 秦晉の匹にして

從來王謝郎 從來 王謝の郎と

私は強く思っていた、娘の鄭家は君の家と（婚儀を交わした）かの秦と晉のようにちようどつりあいがとれ、君はもとより晉の王家や謝家の子弟のような名家の貴公子だと。

趙次公は上句について「并せて兩家の敵あたるを言う」と説

明する。「秦晉の事」には、「春秋左氏傳」僖公二十三年の懷嬴の言葉、「秦と晉とは匹也。何を以つてか我れを卑しむ」を引く。

下句については「又た以つて封主簿の風味を言う」と説

明する。「王謝の事」には、「晉は江左（江南の建業、いまの南京に都をおいた東晉）は王・謝を以つて胄族と爲し、其の子弟は風流也」と述べ、劉禹錫の「烏衣巷」詩の「舊時の

王謝堂前の燕」を引く。

つぎは第十一・十二句。

青春動才調 青春 才調を動かし

白手缺輝光 白手 輝光を缺く

青春眞つ盛りの君はその才氣を遺憾なく發揮したのに、縁談はまとまらず面目を失うこととなつてしまった。

趙次公は上句については「主簿の年少なるを言う也」、下句については「親事合わず、空手にして去るを言う也」と説明する。

なお、下句の「白手」、趙次公以外の宋版はすべて「白首」となっている。もしそれで讀むとすれば、面目を失つたのは封五郎ではなく、「白首」白髮頭のおやじたる杜甫自身ということになる。

つぎは第十三・十四句。

玉潤終孤立 玉潤 終に孤立す

珠明得暗藏 珠明 暗藏するを得んや

うるおう玉と呼ばれた衛玠のように立派な君はとうとう一人ぼっちになってしまった。が明月珠のような君の資質はいつまでも暗中に隠してはおけない（しかし今はそれを出してもわかつてもらえない）。

趙次公は上句については「又た女婿（衛玠）の事を以つて之（封主簿）を歎く也」と説明し、「玉潤の事」には、「白孔六帖」卷二〇「女婿」にも引かれる「晉の樂廣は、字は彦輔、人は之を水鏡と謂う。女婿の衛玠は、字は叔寶、時に玉人と號す。故に時語に「婦翁は氷清、女婿は玉潤」と曰う也」を引く。

下句については「又た以つて封君の美わしけれども投合せざるを紀す也」と説明し、「明珠は、明月の珠を言う也」として、「史記」鄒陽傳の漢の鄒陽の言葉、「明月の珠、夜光の璧は、闇を以つて人に道路に投ずれば、人は劍を按じて相い眇まざる者無し」を引き、「珠は其の明を用いる所無くんば、亦た暗藏する而已。以つて人に投ぜざる也」と

述べる。

つぎは最後の第十五・十六句。

餘寒拆花卉 餘寒 花卉を拆き  
恨別滿江郷 恨別 江郷に滿つ

草花を切り裂く寒氣の残るこの春先、君とのかくもつらい別れを恨む氣持ちが川ぞいの田舎まち一面に滿ちわたる。この末句について、趙次公は「末句は則ち別れを紀す所以なり」と説明する。

三

さて、杜甫がかくも心のこもった詩を作つて「江郷」の夔州から通州に送り出した封五郎は、それからどうなったのだろうか。もしも封五郎が私の推定どおり封揆だとすれば、張勸の書いた「封君墓誌銘」には面白い記述がある。まずはかれの一生の總括。

諸侯の愛は四州に遺り、宜しく慶を積むべき所。大  
夫の恵は百里に敷き、克く大官を享く。壽は僅かに中  
身のみ、位は縣長に終わる。何ぞ報施の謬<sup>か</sup>てる歟。

四州の刺史をつとめた父封議の民衆に施した善政は、子  
のかれにとつて積善の餘慶であり、「工部尙書兼御史大  
夫・魏國公」の賈耽（七三〇—八〇五）が大曆十四年（七七  
九）「惟梁」梁州で「節推」山南西道節度使・梁州刺史・  
御史大夫になった時に、かれが賈耽のもとに赴き、「刺を  
懷き謁を貢し」、耽を助けて「仁恤の惠政」を施したのは、  
大官を得るもどととなつたはずだが、「三河」河東・河  
内・河南の三郡の、旱魃とイナゴの被害で餓えに苦しむ民  
衆を救う食糧支援に奔走したあげく、病氣にかかり死去、  
壽命はたつたの五十一歳、官位は賈耽に推薦してもらつた  
城固縣令どまり、立派な功績をあげながらもそれへの報奨  
はまったく見合っていない。どうもやはり不幸な一生だつ  
たようである。

つづいては家族の記録。

杜甫の仲人失敗について（深澤）

君の伉儷たる滎陽の鄭氏は、君に先んじて逝き、故  
林に<sup>かづも</sup>殯<sup>が</sup>りす。君の遺胤は、四男一女、男は雉を捧  
ぐるを<sup>こ</sup>逾え、女は未<sup>かんせし</sup>まだ<sup>し</sup>笄<sup>に</sup>に及ばず。

封揆が杜甫に世話してもらつたのはおそらく滎陽の鄭氏  
の娘と思われるが、のちにかれが結婚した相手も、なんと  
滎陽の鄭氏だった。これはどういうことなのか。この二人  
の娘は、まったくの別人で、同じ鄭氏に屬したのは、單な  
る偶然なのか。それとも同一人物で、封揆とこの娘はまた  
よりをもどしたのか。それはまったく不明である。

また、母親はすでになく、父親たるかれも五十一歳で死  
亡した時点で残された子供のうち、四人の男子はみな雉を  
持てる五六歳より上で、一人の女子は成年のしるしに  
「笄」かんざしを結髪にさす十五歳にまだなっていないかつ  
た。「捧雉」は「春秋左氏傳」昭公四年の「宿する所の庚  
宗の婦人、獻ずるに雉を以つてす。其の姓を問う。對えて  
曰わく、余の子長ぜり。能く雉を捧げて我れに従う、と」  
にもとづく。「及笄」は「禮記」内則篇の「女子は十有五

年にして筭す」にもとづく。そして、この子供たちは名前もわからず、以後の消息もまったく不明である。